

第2章 外国人とアラビア人の旅行者たち

ウエンデル・フィリップス米国調査団

1950～52年の2年間（注31）、米国のジョン・ホプキンス大学付属人類研究所はウエンデル・フィリップスを団長とする科学調査団を組織した。そして彼は自己負担にもかかわらず、2回のイエメンへの調査旅行を遂行したのだった。

（注31）「古代アラビア史」 フォワード・ハスナイニ著 終章 P. 259 この書は1958年エジプトのルネッサンス書房より発刊

1回目の旅行はバイハーンとその他のイエメン南部地方に調査が集中した。2回目の旅行はイエメンの北東のマアリブに調査が集中している。この調査団には地質学者であり、前述の大学の教授アルブライトも参加していた。

フォワード・ハスナイニ博士は前述の彼の著書の最終章の中で（注32）、この調査団の活動を詳細に述べた後、次のように語っている。

（注32）「古代アラビア史」 フォワード・ハスナイニ著 終章 P. 259

「この調査団の基本的目的というのはマアリブだった。彼等はマアリブに到達し、我々に紀元前7世紀までに遡る遺跡を発見してくれたのである」

調査団はその他で、月神殿或いは「ビルキースの神殿」とか「ビルキースの玉座」と呼ばれているものを発見した。同様に数多くの青銅や大理石の遺跡やサバア王朝の刻文を幾つか発見した。

そしてイエメン政府と調査団の間に見解の相違があったにもかかわらず、調査団が実現した数多くの成功は、アラビア諸学の研究という観点において、我々を大いに豊かにすることになった。それはこの調査団が調査、発掘のために、最新の科学的手段を準備していたからであり、また同様に調査団のメンバーの中には科学の領域における数多くの有名な人物達がいたからであった。調査団がかねて望んでいたものに到達したという朗報がもたらされた。調査団が成し得たことの中で公表したものには、次のものがある。

「1951年4月に米国人類学調査団は、イエメンのイマームであるアハマドと合意を結んだ。その合意の内容は、調査団にマアリブ周辺地区における発掘作業（の許可）をイマームが公表する、というものであり、その範囲は概ね25kmであった。1951年11月1日調査団は発掘を始めた」

しかしながら調査団は1952年2月12日に発掘作業を中止せざるを得なくなった。これは調査団とイエメン政府の高官達との間に起きた対立のためであった。この対立は価値ある遺跡の喪失を導いてしまった。しかしビルキース神殿で調査団が発見したものは、非常に価値あるものであった。

乳香の故郷でありハドラマウトの東に位置するザファールで、調査団はこの地区を調査するのに概

ね10ヶ月を費やした。同様にハドラマウトのアルバリードとハウルバリーでも発掘作業を遂行した。

注目に値することは、アルブライトがイスタル（メソポタミヤのイシュタル）神のものであると確信している寺院の中庭で、回廊に使われた石群が発見されたことで、その石の一つ一つが南部アラビア語のアルファベットを持っていた。それは形の類似により整理配列されていた。南部アラビア諸国についての我々の学問的財産の増大に対する功績は、ここ数年では疑いもなく、この前述の2つの学問的な果敢な活動に帰するものである。

即ちこの事は、バイハーンやハリーブ地区におけるカタバーン王国での調査活動に結び付くことが再度明らかになったのである（注33）。アルブライトは言った「まるまる2つの季節、そこで発掘調査した後、カタバーン王国を調査団は離れた」

(注33) 「古代アラビア史」 フォワード・ハスナイニ著 終章 P. 286

1回目は1950年3月4日～4月18日の期間で、調査団はその期間中、バイハーンのワーディ（涸れ川）と東南の入り口、そしてハジャール・ブン・ハミード（注34）やハミード・ブン・アキールそして個人の家を調査した。

(注34) カタバーン国の首都タムナアの南方に位置するハジャール・ブン・ハミード（現在の地名とアラビア語のスペルが違う）のことで、9マイル離れている。また彼の地は考古学的に有名な地域である。

第2回目の季節は1951年2月～5月11日までであった。その間調査団は以前の季節に始めていた作業を継続した。そして南アラビアの国々についての知識や情報を私達の元に豊富にもたらした。また今日私達を多くの知識人や王達について精通させしめた。同様に以前は名前しか私達に分かっていなかった王達とその支配の間に生じた出来事の幾つかを知らしめたのであった。そしてこの書籍の中でカタバーン王国についての特別な章で取り扱われる折りに、上記の事は述べられるであろう。

今までの事柄は（注35）外国人東洋学者達が行った幾つかの旅の中でのことであった。彼等はその旅の中では、地理学の分野に力点を置いていた。彼等の中にはハロルド、インジラーミル、及びA・ハミルトン中佐等がおり、彼等全員はその他、ハドラマウトにも関心を注いでいた。またタージャー中佐も「幸福のアラビア」への数多くの旅を行ったが、その旅については地理学の紙面において語られている。

(注35) 「古代アラビア史」 フォワード・ハスナイニ著 終章 P. 256

アラビア人の探検家達も幸福のアラビア（イエメン）への旅を行っている。そしてその旅行で有益で科学的な結果を導いている。そしてそれらの旅行家達には次の者達がいる。

ナジーム・ムアイイド・アルアザム

シリア人旅行家のナジーム・ムアイイド・アルアザム（注36）は、マアリブとサルワーフそして幾

つかのイエメン東部の遺跡に満ちた地域を1936年に旅行している。そして「ナジーム・アルアザムのイエメンへの旅行」と題する彼の書籍の中で、獲得してきた情報を公開している。それは1938年のことであった。

(注36) 「古代アラビア史」終章 P.256

エジプト大学派遣団

1936年（注37）、現在のエジプト大学の前身フワード大学も、スレイマーン・ハッジーム博士を団長とする考古学派遣団を送り出した。

この派遣団はイエメンに滞在した約6ヵ月間の殆どを遺跡が多く残っているハーシド地方のナーイトで過ごし、幾つかの第一級の発掘を行った。またハドラマウトにも一時的に訪れたりもした。

そして1943年にこの団員の1人であったヤヒヤー・ハリール・ナーミー教授は、この時に発見したイエメンの刻文について「イエメン南部の古代セム語の刻文」というタイトルで論文を発表し、その中でこの刻文について説明している。

(注37) 「古代アラビア史」終章 P.256

ムハンマド・タウフィーク教授

1942年（注38）、上述のエジプト大学派遣団の一員であったムハンマド・タウフィーク教授はイエメンに戻り、その後カイロに帰ったのであるが、1945年彼はエジプト政府から「イエメンへのイナゴの移動」という課題の研究を委託される、というチャンスを得て、再びイエメンに戻ってきた。

彼は当時のイマームであったヤヒヤー・ハミード・アッディーンにアルジャウフ訪問を申請した。そして許可を得ることが出来、多くの写真を撮ることに成功した。その後エジプトに帰国してから、この旅行の成果を「イエメン南部のマアーン王朝の遺跡」という本にまとめ、出版した。

(注38) 「古代アラビア史」終章 P.256

アハマド・ファフリー博士

エジプト大学の教授アハマド・ファフリー博士は、1947年（注39）にイエメンを訪問した。訪問に際しての教授の関心は3ヶ所の遺跡地帯に集中していた。それはサルワーフとサバア王朝とマアーン王朝の首都であったマーリブ、そしてアルジャウフ地方のマアーン王朝の首都であった。教授は沢山の考古学的な絵画と以前に発表されたことのない130もの刻文と一緒にエジプトに持ちかえった。

(注39) 「古代アラビア史」終章 P.258

学者達の諸論文、及び博物館、諸研究所、出版社の イエメンの遺跡に関する出版物

こうして次々に（注40）、外国人とアラビア人の旅行家達は遺跡の残るイエメン各地に調査旅行に

行った訳であるが、他にも上述また同様にフリッツ・ハウメル教授（注41）は、古代南アラビア語の語彙辞典の中で、文法について記し、それに関する参考資料やテキストを公表し、確実性を増している。

（注40, 41） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.25

そしてベルリン大学の教授マルチン・ハルツマンは、南アラビアの諸国の公的生活と社会生活について遺跡に基づきながら研究を行い、それを出版した。

彼と同様の事を行ったのは、ベルリン大学の別の教授のホグハंकラル（注42）であり、彼はそこで研究し、古代南アラビアのテキストの幾つかを出版した。

（注42） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.26

同様に多くの博物館や諸研究機関や出版社等（注43）が出版物を刊行しているが、学者や研究者達がイエメンに関する研究や調査を次々に発表してきた故であった。

また1950年2月4日付けのロンドンタイムズ紙（注44）は、ヨーロッパの旅行家が馬に乗って、バイハーン地区からカタバーン王国の首都カハラーンまでの旅行し、それについての回想録の要約を掲載している。

（注43, 44） 「古代アラビア史」終章 P.259

多くの彫刻や考古学的な絵画を手に入れ、それを保管している次の様な多くの博物館や諸研究機関等（注45）がある。

（注45） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.22

オーストリアのウィーンには、芸術歴史博物館があり、それは様々な彫刻や彫像そして石に刻まれた40点近い刻文を所蔵し、また古代アラビア文字の幾つかを所蔵している。それらは全てエドワルド・グラッツェルが手に入れたものである。但しこの博物館は前述のウィーンのアカデミーとは別個のものである。

またイスタンブールのトルコ博物館（注46）には、サバア王朝の考古学的な5片の遺物を含む古代イエメンの2つのグループの遺物を保管している。トルコ人達はかつてイエメンにいた折にそれらを得たのであり、この博物館はそれらを一般公開している。

（注46） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.16

「イエメン概説史」第1巻P. 30-36